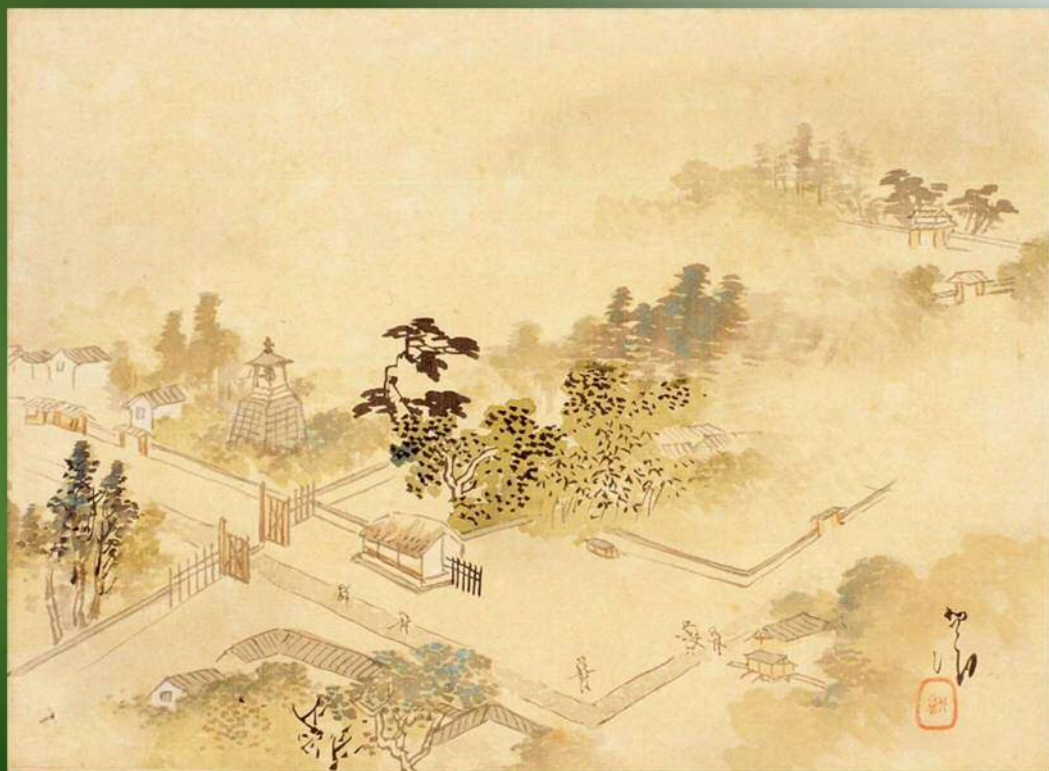


城口晩鐘



きく人も淋しくぞ思ふ夕ぐれを猶しのべとや城口の鐘 花友

竹たばと音にひびきし城口にあわれ身にしむ夕ぐれの鐘 面造

とふ人もたへてさびしき夕ぐれはあわれ身にしむ城口の鐘 千代住

旅人も今岩つきに着にけり城の口にも入相のかね 春成

風さそふ夕べの空の雪もよひおぼろに響く城口のかね 若芝

城口と名のみ残りて夕暮はいよ／＼淋しき鐘の音かな 陰行

秋風の吹夕暮は城口のかねの音さへ淋しかりけり 本也

秋さればあわれ淋しき城口にかねの音ひびく夕暮のころ 同

武士の夢の跡なる城口に淋しさつぐる夕暮のかね 同

むかしより今も変らぬ城口に淋しさつぐる入相の鐘 一誠

うき秋の日數暮れ行く淋しさをつぐる夕べの城口の鐘 鴛楽

城口の夕べの鐘の音につれてねぐらへかへる群鳥かな 友呼

さらぬだに淋しき秋を城口にあわれ覚ゆる入相のかね 系丸

城口は名のみこりて夕まぐれ音づれ淋し入相のかね 同

うき秋のあわれ覚ゆる城口に耳驚かす入あひのかね 同

入相の鐘を相図に伍をついて斥候の馬かへるしる口 兎笑

おごそかにごうん／＼を用よとや入相つぐる城口のかね 同

月を待つ秋ぞうれしき城口は花にうらみし入相のかね 鶴成

守る人もあらでとしふる城口に淋しさつぐる入あひの鐘 系丸